

〔書評〕

竹岡正夫著 「富士谷成章全集」 上・下

阪倉篤義

「富士谷成章全集 竹岡正夫著」といふ、この書物の背文字をみたとき、ちよつと妙な感じをもつた。竹岡氏が、今日において、成章の全集を編まれるのに、もつともふさはしい学者であることは、これはもう万人のみとめるところである。が、その全集が、竹岡氏の「編」ではなくて「著」として刊行されることの理由が、上巻をみたかぎりでは、私にはどうも十分に納得できかねた。いはゆる個人の「全集」なるものが、その個人とは別の、研究者や讃仰者の手によつて刊行される場合には、「何某編」または「何某校訂」などと称するのが常識であると承知してゐたからである。ところが、下巻をみるにおよんで、これが竹岡氏の「著」として刊行された理由が諒解できた。と同時にしかし、今度は、この上・下二冊が、「富士谷成章全集」と名づけて刊行されたことの不当さを、おもはざるをえなくなつた。

この書物を、「富士谷成章全集」と称することがあたらないとす理由は、二つある。その一つは、この書物は、上巻に、成章の学問の中心である語学方面の著作と、これに密接な関係をもつ歌学に關

する著作とを収め、下巻に、その歌文・漢詩・評論・隨筆・小説の類をあつめてゐる（それらは、従来しられてゐる語学者としての面以外の成章をしようするための貴重な資料を多数にふくむといふことだけはなしに、ひろく近世の国文学・漢文学研究のための新資料を提供するものとして、その意義がちひさくないであらう）けれども、著者竹岡氏自身が序でことわつてをられるやうに、ここには、成章の書翰や短冊・色紙の類、あるいは成章の校訂・書入の類は、すべて省略されてゐる。その点で、これは、断簡零墨の類をも博搜して収載した、いはゆる「全集」とは、その類をことにする。むしろ成章著作集とでも称すべき体裁のものである。第二に、逆にこの書物には、上巻所収の歌学書「起情指揮」（御杖著）や、下巻に「付編」として収めた、皆川淇園の「助字詳解」や福田美楯の「奥呂九ヶ条伝」、保田光則の「脚結抄増補」のやうな、成章以外の著者の手になるものが含まれてゐる。いふまでもなく、成章の学説の理解に資せんとする著者の配慮にもとづくものであつて、さうした配慮は、上巻に収められた代表的著作「かざし抄」「あゆひ抄」の内容に關する、著者苦心の多数の論注にもよくうかがはれよう。これはもう決して、著作集の編纂者が、「念のため書きそへた注解」といつ

た類のものではない。その点で、なによりも注意されるのは、下巻の後半四七二頁ばかりをしめる研究篇と名づけられる部分である。

その第一部には成章の著作の解題ならびに研究（あたらしく成章の著と考へられるものについて、理由をあげての認定。従来、成章の歌学説と御杖の歌学説とが混同されてゐた点についての説明。また、それらの学術的価値についての論定など）を収め、第二部には、成章の学説についての解説をおこなひながら、それに対する著者の解釈や、さらにそれを基礎にしての著者自身の考説、が開陳されてゐるのである。いはゆる著作集に、その著作についての書誌的な解説や、その価値を闡明するための文章が考へられることは、きはめて普通であつて、第一部はさういふものと見なすこともできなからはなからう。しかし第二部の方は、成章の説といふよりは竹岡氏の説といふべきものであつて、成章全集または成章著作集のなかには、もはやをさまりきれない性格のものである。成章の語学説を、「換玉帖」の歌学説などとあはせて考察し、かくして明らかにされる、彼の全学問体系のなかに位置づけることによつて、その語学説のよりふかい理解をもとめるとともに、その価値の高さと、射程のひろさを顕彰しようといふ著者の意図は、よく理解できるが、それだけにまた、この部分が、単なる附録といふやうな意味で見られることは、もちろん著者の本意ではないであらう。

つまり、本書は、おほきくいつて二つの部分にわかれるのである。第一部にあたる著作篇ないしは翻刻篇（もつとも、かういふ名称は、本書にはつけられてゐない）に対する、第二部にあたる研究篇（さらには「論注」をもふくめて）は、本来、たとへば「富士谷成章研究」といつた表題の書物として、別途に刊行されて然るべき

ものなのである。それが、あへて一つにだきあはされて、「全集」の名のもとに刊行されたといふ感じをまぬかれないのが本書であつて、「富士谷成章全集 上 語学篇 論注 竹岡正夫著」といふ表題の書きやうは、まさにこの事情を示すためのものなのかもしれない。もちろん、このことは、氏の永年にわたる成章の著作発掘集成的ための労苦の功と、また成章研究の美事な成果の価値とを、いささかも左右するものでない。しかし、それだけにまた、かうした、書物の構成ないしは表題のまぎらはしさが、一層気になり、かつは惜しまれるのである。

さて、本書は、上巻一三〇〇ページ、下巻一二六六ページ、あはせて実に二五六六ページといふ、文字どほりの大作である。しかも、そのうち上巻のすべてと、下巻の六〇〇ページ、——といふことは、全体の3/4弱は、翻刻および、その論注よりなつてゐる。したがつて、これを書評するとなると、まづ、かつて、おなじ著者の「あゆひ抄新注」を評するにあつて井上誠之助氏がなさつた（国語学 43）やうに、その翻刻が、原本をどれほどあやまりなく、たくみに、かつまた現代の活字様式にふさはしく、うつしかへてゐるかを、いちいちこまかく検証しなければならぬし、つぎにまた、「論注」については、その一つ一つについて、その内容がはたして適切であるか否かを、くはしく検討して行かなければならぬいだらう。けれどもそれは、いまの私にとつて、力にあまることで、とうてい完全を期しえない。それにまた、ここに翻刻されてゐるものうち、「稿本あゆひ抄」や「よそひ本抄」「万葉類語」と名づけられてゐるものその他は、富士谷家に伝来してゐたものが著者の架蔵に帰し、そしてここにはじめて発表されたものであつて、たとへ

みぎのやうなことをころみよとして、いまにはかには、不可能な事情にある。わづかに刊本などについてたしかめ得るかぎりでは、上巻については、下巻末に付せられた正誤表に記載されたもの以外のミスは、発見できなかった。前著「あゆひ抄新注」の本文は、読者のために、原本にない振仮名などが多数にはへられてゐるが、それに対して、今回は、著者があらたに加へた振仮名は括弧でかこんで示すなど、一層、原本の形をしめすことに意がそがれてゐるやうである。ただ下巻については、四二五ページ11行目、上より九字目が已になつてゐるのは、兄（見の変体仮名）である。

## 二

「かざし抄」「あゆひ抄」につけられた注・補注は、著者が学生時代以来ひとすちに打ちこんでこられた成章研究の成果の、重要な部分をしめすものである。「成章の説と、それまでの伝統的の歌学書などの説との關係を明らかにし、かねて成章にいたるまでの、一つの研究略史たらしめようとする」のが、この注の第一の目標であることは、凡例にことわられてゐるが、単にそれだけではなしに、ここには、たとへば「をりはへ」「なり」「つつ」「らむ」「けり」「はた」「まし」等々の語について、著者自身の考説が、かなりくはしく述べられてゐるやうな場合もある。自然、注・補注のつけ方は、語によつて繁簡まちまちであつて、一貫せず、「錯雑してゐる」「竹岡氏の本意がなへんにあるのかみきわめがたい」（根來司氏、「言語と文芸」四ノ六所載の書評）やうに感じられる。もつともこれについての著者の本意をうかがふと、論注の第一の目的は、右のやうに成章の説と伝統的諸説との関連を見ることであつて、それぞれの語

について成章の真意をいちいち説明しようとしたものではなく、また、成章の所説の真意が、今日たゞしく一般に理解されてゐるものについては、いちいち言及せず、問題にされたり誤解されたりしてゐると思はれる点について、成章と同説で一層くはしい妥当な説ある場合は、成章以後のものを含めて、これをあげ、他に妥当な説なきときは著者自身の説（末とす）「さす中のや」などを述べる、そして現代の通説に対して著者が異見をいだくもの（前掲のものなど）については、多少くはしく自身の説を述べる、といふやうな方針であるらしい。さう思つてみるによつて、右にいつたやうな、前後一貫せずとみえる点が、単なる著者のきまぐれによるものではないことが諒承される。けれども、その点を諒承しても、なほ、錯雑の感はやほりのこるやうである。著者は一七〇種におよぶ明治以前の歌学書・語学書の類（その一覧表は上巻九ページ以下にかかげられてゐる。ついでをもつていへば、そのうち、日葡辞書がバジェスによつて慶長八年に成立したやうに記され、かつ、その所収本として「日仏辞書、土井忠生刊」とあるのは、一体どういふことであらうか。上巻一一三ページに「バジェス『日葡辞書』では……」とあるのは、下巻末の正誤表に訂正されてゐるが、右はなほ訂正されてゐないやうだ）および、明治以後の多数の国語学書や論文から、關係記事を引用されてゐる。その努力が非常なものであつたことは、十分に推察されるのであつて、ふかい敬意をささげるが、しかし、その引用を年代順に排列されたためであらうか、かならずしも十分な整理がほどこされてゐないやうにみえる。そのために、それら先行の諸説に対して、成章の説が、はたして、どの程度の直接的あるいは間接的影響關係に立つものなのか、あるいは立たないもの

か、さらにはまた、それらに対して成章の説がどのやうな独自の価値を有するか、などについての説明が不足で、読者にとつては、かならずしも十分に納得できない場合がある。いはば著者のノートを、なままでつきつけられたやうな感じがあつて、そのため、やや極端な言ひ方をすれば、関係のある言説を手あたり次第に抜き書きされたものといふ感じさへする場合がある。研究略史的な性格をもたせることが、この論注の、まづ第一の目標であつたとすれば、この点に関する配慮が、いますこしはらはれてもよかつたのではなからうか。

そして、このことにも関連するが、著者は、いはゆる挿頭・脚結に属する諸語の「本義」を説明すべきことを強調される。著者によればそれは「認識のしかた」をいふのであり、その背後には一種の言語の過程観があると説かれるが、卒然としてみれば、これはほぼ、いはゆる意義素、ないしは、それらの語の機能をきはめて抽象的に考へたもの、にあたるかと思はれる。この私のうけとり方は、あるいは著者の真意をあやまつてゐるかもしれない。しかし、今はこのことが直接の問題ではない。問題は、著者が、かうした「本義」の解明にあたつてとるべき方法は、単に用例を数おほくあつめて、そこから帰納するといふのではなくて、それらの語がなほ生きて用ゐられてゐた時代の人々の、その語の意味や用法についての所説を第一の資料とすべきであると説かれてゐる点に關してである。「かざし抄」や「あゆひ抄」があつてゐるやうな種類の語について、右のやうな、同時代人の、その意味や用法に關する言説が多数得られるならば、これに越したことはないこと、もちろんである。しかし、そのやうなものが簡單には得られないことが問題であらう。も

し、中世の歌学書や、てにをは研究書、さらにはキリシタンの語学書などに説くところを、ただちに、「それらの語がなほ生きて用ゐられてゐた時代の人々の所説」であると考へうるならば、問題は別である。いかにもそれらは、ある意味においてなほ「生きて」ゐた。けれども、その意味や用法は、すでに上代や平安時代のそれと、かなりにずれてしまつてゐるものが少なくない。それでもなほ、それに関する右のやうな所説がその語の本義を探索するうへに意味があるとするならば、語の本義なるものは、さうした変遷にもかかわらず、それを越えて、なほその根底に不変のものとして存在するものをいふことにならうが、著者のいはゆる本義といふのは、さういふものではなくて、特に上代ないしは平安中期ごろまでにおける、その語の意義・機能に限られてゐるやうである。そのことは、たとへば、「うたがた」といふ挿頭についての論注に、「当時すでにこの語の意味が十分わかつていなかつたことは、右にあげた多くの論からもうかがえるから、本義を考える上にはあまり参考にならない」と述べられてゐる(上、一二三ページ)ことから推察される。さうすると、著者が、さういふ本義の解明にあつて、「當時の各種の用例と共に第一の資料とした」といはれる「その語がなほ生きて用ゐられてゐた時代の人々の、その語の意味や用法に關しての所説」といふのは、たとへばどういふものを指して言はれるのであらうか。「けり」の本義の説明に用ゐられた枕草子の例(上、九一五ページ)などをも、さういふものと言はれるのであらうか、知りた

### 三

研究篇には、第一部として成章の著作の解題・研究を収め、第二部には、成章の学説を、その源流から説いて、そこに一種の言語過程観といふべきものがあるといひ、著者のあたらしい言語過程観による「解釈」の考へ方や、換玉帖の所説に示唆された、「表」「裏」といふ考へかたにもとづく文章研究の方法などが、提唱されてゐる。すなはち、ここでは、成章の学説に対する解釈にことよせて、著者自身の考へかたを述べることが意図されてゐるものと解せられる。そのためしばしば引きあひに出されるのは、時枝誠記博士や山田孝雄博士の文法学説であるが、そのなかには、ところどころ、著者の誤解にもとづく、いはれなき批難もふくまれてゐるやうに思はれる。

たとへば、語の認定に関する山田博士の考へかたを批判するにあつて、著者は、「日本文法学概論」をひいて、

かくて、ここに、文法学上の最小の単位が、思想上「分析的の見地よりしてその極に達したる」「単語」と、「語句の用法上より見れば、それが一の語として取扱はれる」「合成語」との二種あることになり、その認定のしかたは全く別個の観点、立場よりなされてゐるということになつてくるのである。当然、これは、「分析的見地」か、あるいは「実地の運用上」かの、いずれか一の観点で一貫すべきである。

と述べられてゐる。これによると、あたかも山田博士は、文法学上の最小の単位として、二つの異質な観点から設定されたものを、ならべ説くものやうにみえる。しかしながら、「概論」には、

合成語は語の用法上より見れば一の語の資格を有し、それが内部の分析を認むべからぬものにして、句論に於いては全く単語

と同等の取扱を受くべきものなりとす。(四〇ページ)  
と言ひ、また、

単語と合成語とは用法上同じく一の語なれど、その内部の組織を分析的に見れば、組織の単純なると組織の複雑なるとの差によりて区別ありといふべし。(同ページ)

と言はれてゐる。すなはち、単語といひ合成語といふのは分析的見地よりの名称であつて、用法上の見地よりは、両者はともに、一語と称せられる。そこには、はつきりした見地の区別が立てられてゐるのであつて、それらが「一様に同一次元において考えられてゐる」(一一三ページ)とすることは、あたらない。著者が、話手の意識(認識?)の段階から具体的表現の段階までの過程的差別を明確に認めて、これを単語および語の名をもつて区別しようとする考へかたも、だから、実は、これにちかひものがあるのではなからうか。

著者が、山田博士において右の二つの区別が明確でないと考へられたのは、その「語論」のなかに「語の運用論」が、同時にあはせ説かれてしまつてゐるとしたからであらうかと思はれる。それは、下巻末の「後記」に、「文法研究を建築物に例をとつていへば、そこには、まづ設計図をつくり、建築資材の質や量を考慮する第一段階と、それらの資材をいかに用ゐるかを考慮する第二段階と、そして、出来あがつた建築物を住む側から問題にする第三段階とがあるが、従来、いはばこの第一段階(語論)と第三段階(文章論)とに立場をおいた研究は多かつたけれども、第二段階に立場をおいた研究が比較的見のがされてゐて、せいぜい第一段階の末尾でか、第三段階の冒頭で触れられるにすぎなかつた。そこに新しく立脚点を求

めるところに、自分の研究の意義があるのだ」と言はれてゐるところに、よくうかがはれる。ところが、この建築物の比喩は、実は、山田博士が概論の第二十四章「語の運用の研究序説」に述べられてゐるところのものであつて、博士が、わざわざさういふ比喩を用ひてまで説かうとされたのは、やはりこの三つの段階に理論上区別すべきもののあることを明確にしようとしたからである。山田博士の文法体系では、全体は大きく語論と句論とに二分して説かれてゐるけれども、実は、その中間に「語の運用論」をおいて、三分されてゐると見るべきものだと、私は考へてゐる。したがつて、従来この第二の段階に立場をおいての研究が無視されてゐたなどとは言へないものであらうと思ふ。

けれども、しかしこの研究において著者が拠らうとされる第二段階的立場といふのは、もちろん、従来のもと同じものではない。永年にわたる成章研究を通じて獲得された、新しい観点からの照明を、さうした立場から、文法研究・文章研究にあてられたならば、そこには、かならずや、従来の方法によつてはあげることのできなかつた成果のうまれてくることを期待することができよう。著者とともに、私もまた、それを信じ、かつ祈りたい。

本書の上巻が刊行されたのは、一昨三十六年の三月、下巻も昨三十七年の三月には刊行されてゐるから、いづれも、いまからはすでに一年ないし二年以上まへのことになる。その書評を、はやく編集部から命じられてゐながら、今日にいたつたのは、ひとへに私の怠慢のゆゑである。著者ならびに読者に対して、ふかく、おわび申しあげる。

余白を利用して、最後に、下巻の正誤表をかかげておく。

ページ	行	誤	正
七九二	9	十四	四十
八三二	-3	『近世名家遺文集』	『近世名家遺文集』
九四六	2	見返し	見返し
九五七	7	門入	門入
一〇九二	2	付いた方	付いた方
一一五二	5	山賤 <small>が</small>	山賤 <small>が</small>
一二一七	3	〇述懐の和歌あり。	この条を、一二二〇ページ 安永六年の項に移す。